



ラクロリアン談話分析の視座と射程：英国財政危機談話を事例に

著者	清水 習
雑誌名	同志社政策科学研究
巻	18
号	2
ページ	27-40
発行年	2017-03-10
権利	同志社大学政策学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015356

ラクロリアン談話分析の視座と射程

—英国財政危機談話を事例に—

清水 習

概要

談話理論 (Discourse Theory)・談話分析 (Discourse Analysis) とは、1970 年代からはじまる西欧人文・社会科学における「言語論的展開」において誕生した理論と分析手法である。日本社会科学においては、依然、その認知度は低く、「談話分析」と「言説分析」が同義語として捉えられるような風潮や、「熟読」的解釈手法が「言説分析」として捉えられる傾向にある。この誤用の要因は諸所あるものの、談話分析の近現代社会科学における学術的所在が不明瞭であることが挙げられるだろう。本稿では、この問題に対し、談話理論と分析誕生の背景を整理し、また、英国財政危機談話の例をもとに分析手法とその応用を明確にすることで、その研究視座と分析射程を思想的に明らかにした。

1. はじめに

近現代社会学研究における一つの潮流として、「論理実証主義の興隆」という現象が挙げられる。合理主義的アプローチや統計手法に基づいた研究が、真実を明らかにする最適な手段として、支配的に承認されているということである。この論理実証主義の興隆に対してオルタナティブな研究視座を展開したのが、談話分析である。厳密に言えば、談話分析という分析手法とその理論は単一ではない。80年代の言語論的展開の中、英国ランカスター大学の Norman Fairclough や Ruth Wodak を中心とした言語学者らによって確立されたアプローチや蘭国アムステルダム大学の Teun van Dijk らによって確立された言語心理学的アプローチなどが存

在する。これらのアプローチにどのような相違点が存在するかは重要な研究テーマとなりえるが、本稿では、英国エセックス大学の Ernesto Laclau によって確立された脱構造主義的談話分析手法とその理論に主眼をおく。Laclau の談話分析における特徴の一つは「闘争性」という概念である。

論理実証主義や合理主義をベースにおいた研究では、諸所の研究における基礎的理論や思想の究極的な共約不可能性は、より合理的な手法やデータの改善により乗り越えられるものと考えられてきた。しかし、Laclau は脱構造主義的反本質主義をもとに、この論理実証主義や合理主義の考えを否定する。反対に、共約不可能性を世界の理解の本質と捉えることで、談話の闘争性を提唱するのである。Laclau にとって、談話 (Discourse) とは、「非思想的なもの」と「思想的なもの」が統一的に関連付けられた空間として認識されるが、この統一性は本質的に不完全であり、不完全であるが故に、他の共約不可能なオルタナティブな談話と対立を起すということである。そして、この対立の動向とその収束までを分析手法を踏まえ理論的に提示することで、新たな社会科学理論と手法を提示したと言えよう。本稿では、このラクロリアン脱構造主義的談話分析がどのような学術的背景で誕生したか、そして、現代社会科学においてどのような位置づけがなされるべきかを、その分析の基礎となる哲学と理論、また、その応用を明確にしつつ、思想的に明らかにするものである。

新たな理論の誕生には常に複雑な諸所の背景とそれらの相互関係が存在するが、本稿では、

「分析手法における背景」「哲学的背景」「歴史的背景」の三つに焦点を絞ることとする。つまり、談話分析が誕生した「分析手法における背景」「哲学的背景」を明確にし、英国財政危機談話を例に、分析の理論と応用を提示することで、最終的に、「歴史的背景」、すなわち、近現代社会科学の潮流における談話分析の手法と理論の所在を明らかにする。

2. 分析手法における背景

談話分析の学説史における系譜的位置づけを明らかにするために、欧米におけるイデオロギー分析がどのように発展していったかを振り返る必要がある。談話分析の第一義的な分析目的はイデオロギー分析、つまり、社会・政治・経済等における思想的なモノの役割を批判的に分析することといえる。したがって、「思想的なモノを巡る分析」が近現代社会科学においてどのように発展していき、どのような限界を迎えることとなったかを歴史的に振り返ることで、談話分析誕生の契機となった背景を明らかにすることができるであろう。

はじめに、古典的もしくは代表的なイデオロギー分析手法としてタイポロジカルなイデオロギー分析を挙げることができる。つまり、「左派と右派」や「社会主義」「共産主義」といったものを列挙し、それぞれの特徴をあげていくといった「タイプ分け」的なアプローチである (Freeden 2003; Haywood 2003)。このようなアプローチは、社会階級などのグループ分けがある程度明確な時代においては、有益であったといえる。しかし、このようなアプローチのイデオロギー分析の射程は、大文字の I から始まるイデオロギーであり、その点において限界が存在する。つまり、プラトンのイデア論のように、メタレベルでのイデオロギーのタイプが存在し、そのタイプを明らかにすることが目的となっている。しかし、このような、タイポロジカルなアプローチでは、イデオロギーの変容とその動向を理解することは困難である。この限界を特に顕著なものにしたのが、サッチャーリズムなどの新保守主義や新右翼の誕生である。

遡及的に顧みて、新保守主義や新右翼の誕生、また、冷戦の終わりを迎える 80 年代は、社会科学における新たな視座の誕生の時代といえる。後章で明らかにするように、この時代における「論理実証主義」から「脱構造主義」への哲学の潮流の編成や「イデオロギーの終焉」という政治経済的現象がこの時代の知識人に分析手法や理論の変革の可能性と必要性をもたらしたともいえる。イデオロギー分析においても、談話分析等の新たな手法が生み出されたのも、また、この時代である。しかし、談話分析よりも先に古典的イデオロギー分析に対してオルタナティブな手法として広く認知され始めたものとして、Peter Hall が提唱した「パラダイム分析」があげられる。

Peter Hall (1993) のパラダイム分析は Thomas Kuhn (1962=1971) が『科学革命の構造』にて展開した「パラダイム論」を政策分析に応用したものである。Kuhn にとって、パラダイムとは、各時代における、科学者集団の共有する知識や理論をもとに研究・発見といった行動が営まれるフィールドを意味した。また、その特定の科学者集団にとって「常識」として認知される知識や理論を「一般科学 (Normal Science)」と呼び、その一般科学が限界やオルタナティブなものによって挑戦され、編成されることを「パラダイムシフト (Paradigm Shift)」と呼んだ。このパラダイム論をもとに Hall は、サッチャー政権下において、経済政策のパラダイムがどのようにケインズ学派からマネタリスト学派へとシフトしていったかを明らかにした。

Hall のパラダイム分析は、イデオロギー論の新たな手法として革新的であった。政策決定過程における意思決定行動の基礎となる思想の編成を明らかにすることで、より大局的にパラダイムというイデオロギー的なフィールドの変革を分析できたといえよう。しかし、Hall のパラダイム論は方法論的に新たな視座を確立したといえるものの、思想の編成に焦点をおいた従来の歴史分析手法の枠を逸脱してはいないという点は否めない。例えば、マネタリスト的な思想を取りこむ際に、どのように、イギリスの伝統産業や文化が、市場自由化のもとに破壊され

ることが正当化されたかなどの、政治イデオロギイ的編成の動向を明らかにできていない。つまり、伝統保守という理念とそれに対抗しうる市場の自由化という理念の整合性確立がどのように行われたかという点がパラダイム論では説明しきれないということである。また、特定の経済思想を政策に取り組み際にも、パラダイム論においては、一つの思想というものが型にはめ込むように応用されていると説明される傾向にある。しかし、現実的な政治の場面においては、上記のような他の要素との整合性の確立は必要不可欠なものであり、このような政治的モーメントについても言及不足である。

以上のパラダイム論の限界に対して、ほぼ同時代的に誕生した談話分析は、言説や言葉、シンボルといったものを現代言語哲学、理論や手法を用いて分析を行っている。この点を明らかにするためには、談話分析が誕生することになった哲学的背景をまず整理する必要がある。

3. 哲学的背景

上述の「政治的モーメント」を検証するうえで、談話分析の理論の根幹をなすのが、「反本質主義哲学 (Anti-Essentialism)」である (Butler, Laclau and Žižek 2011; Howarth 2013, 25-26; Laclau and Mouffe 1985, 107-117)。反本質主義とは端的に言えば、「シニフィエ (表されるモノ)」と「シニフィアン (表すモノ)」の本質的関係性の否定といえる。例えば、目の前の四角い木でできた物体を「机」と呼び、使用することが出来るが、「ベッド」と呼び使用することもできるということである。したがって、表される物体それ自体の存在は認めるが、その物体の絶対的実存的意味は否定するというのである (Laclau and Mouffe 1985, 112-114)。

この反本質主義哲学は、談話分析のみならず脱構造主義の哲学を基礎とする構築主義的分析にも見ることが出来る。しかし、少なくとも欧

米における談話理論の枠組と構築主義理論の枠組みにおける「反本質主義哲学」の所在と重要性は大きく異なっているということが指摘できる¹。端的に言えば、構築主義における「反本質主義哲学」は分析における前提条件としての意味合いが強いが、談話分析においては反本質主義からその理論的構築がなされている。

前提条件として反本質主義を利用した構築主義の一例として Debora Stone (2001) の『ポリシー パラドックス』が挙げられよう。Stoneによれば、「平等」「効率」「福祉」等の政策におけるキーワードの「意味」というものは、「本質的」には決定されておらず、複数の意味/概念が可能であると指摘している。しかし、このStoneの「概念の複数性」の指摘は、反本質主義哲学に基づいた指摘、というよりも、実証または経験に基づいた結論が強い。これは、Hallのパラダイム分析にも同様のことがいえる。実際、Hallにとって「経済学の種類」というものは前提条件となっていることが指摘できる。このような「概念・理論の複数性」を前提とした構築主義的研究は、特に、政治的に応用された思想が、どのように社会、政治、経済の構築をしていくかという「遂行性 (Performativity)」 (Callon, 2006) の研究に特化する傾向にある。しかし、この種の研究の限界としては、先に述べたように、「整合性」をどのように保つか、という点が明確にされない傾向にあることが挙げられる。また、どのように特定の思想が覇権的に波及していくかという点が理解できたとしても、その波及の過程におけるオルタナティブな思想との闘争性が明らかにされていないことも指摘できよう。事実、欧州構築主義の理論的旗手である Michel Foucault (1978-79=2008) も自身の統治論を展開した『生政治の誕生』において、統治性 (Governmentality) における「思想の闘争こそ、政治である」として闘争性の研究の重要性を示唆しながら、結びとしている (Ibid, 313)。この構築主義的アプローチの二つの限界において、脱構造主義者は「反本質主義」をもとに、独自のアプローチを提唱している。

¹ また、アンドレア・ゴファスとコリン・ヘイらが指摘しているように、どの程度の「反本質主義」を分析理論に認めるかで、構築主義の種類も変容すると言える (Gofas and Hay, 2010)。

反本質主義哲学をもとにした「概念の複数性」の理論化の発端は、英国政治哲学者 Walter Gallie (1956b) の本質的競争可能概念 (Essentially Contested Concepts) に見て取ることができる。Gallie によれば、「科学」「芸術」「民主主義」等といった概念は、どの理論に依拠するかで異なる概念構築が可能となる (Gallie 1956a&b&1957)。例えば、Kuhn のパラダイム論のように、「科学」とは、時代ごとに意味合いが異なり、「民主主義」においても、古代ギリシャをもとにするか、中世ヨーロッパの概念をもとにするかで変化しようということである。この概念の複数性において、Gallie は最終的に、どの概念も絶対的に正しいわけではなく、しかし、どの概念の提唱者もその正当性を主張するため、正当性をめぐり、競争的になると主張している。

Gallie の本質的競争可能概念は Wittgenstein の「家族集合 (Family Resemblance)」概念をもとにしたものである。Wittgenstein (1953=1978) によれば、言葉の意味や物事の分類分けは、部分的で曖昧な表象の共通性の中から浮かび上がってくるものであり、絶対的な定義の不可能性を示唆している。したがって、Gallie の本質的競争可能概念は Wittgenstein の反本質主義的思想から概念の競争性までを理論化したものといえる。Wittgenstein の「家族集合」概念を脱構造主義的哲学の一端と捉えたとするならば、Gallie の理論はその哲学を用いた「概念の闘争性」を表したものといえる。しかし、Gallie の理論の重要性は、その理論自体もそうではあるものの、その理論が提供した方法論的視座にもあるといえる。

20 世紀哲学を牽引した思想は諸所あるものの、Wittgenstein の貢献は最も大きなものの一つに挙げられる。Wittgenstein 前期の理論と呼ばれる『論理哲学論稿』(1921=1971) によって、ウィーン学派が創設されたように、論理哲学はその最盛期を迎える。これは、政治や経済、社会研究の分野において統計や数理論、物理法則を応用した科学手法の台頭を後押しするかたちとなり、古典的な政治哲学などは衰退の一途をたどることになった。この論理哲学の潮流に対して、哲学的考察の意義の確立を画策したもの

として Gallie の本質的競争可能概念を位置づけることができる。また、その際の拠り所となったものが、Wittgenstein 後期の理論となる『哲学的考察』(1953=1978) である。反本質主義という本質が脱構造主義の本質であるという批判はあるものの、反本質主義をもととした言語論的分析を脱構造主義の基本と考えるとするならば、Wittgenstein を脱構造主義者と位置づけ、Gallie を初期の脱構造主義的分析理論を確立した者と認識することは難しくないのであろう。しかし、Gallie の本質的競争可能概念の限界は、「競争性」の源泉を「理論の複数性」に依拠していることにあるといえる。つまり、上述の構築主義のように、「理論の複数性」は経験則的な前提にされているということである。これに対して、談話分析者は、概念や理論の複数性とそれらの闘争性をより徹底した反本質主義をもとに理論構築し、新たな方法論的視座を提供した。

4. ラクロリアン脱構造主義的談話分析論

概念、理念、または理論の複数性に関して、闘争性を主張する代表的な談話分析論者に Ernesto Laclau (1990&2005; Laclau and Mouffe 1985) があげられる。Laclau の談話理論は、『ヘゲモニーと社会主義戦略』の共著者 Chantal Mouffe やスロベニアの哲学者 Slavoj Zizek (1989) らの影響が多分にあるものの、英国エセックス大学における彼の弟子らによって、理論から方法論へと発展したことから、ラクロリアン談話分析 (Laclauian Discourse Analysis) またはエセックス学派 (Essex School) として欧州アカデミアでの認知を確立している (Howarth et al. 2000)。

Laclau の談話分析と闘争性の概念は、上述の言語論的反本質主義に依拠している。Wittgenstein や Derrida ら脱構造主義の理論をもとに、意味の構築というものは偶発的な所作によるものであると Laclau は主張する。つまり、意味というのはエッセンス (本質) の集合体を実在的にあるのではなく、実存的にエレメンツ (要素) が関連付けられることで構築されるということである。この関連付けられる、または、

関連付けする行為は、発話するという意味でもある Articulation に掛けて、Articulatory Process と呼ばれる (Glynos and Howarth 2013, 166-208; Laclau and Mouffe 1985, 107-117)。例えば、「机」の概念は、「四つの脚」の上に「平たい板」が乗った「木製」のものとして定義づけることができる。ここで、「四つの脚」「平たい板」「木製」というものが関連付けられることで、「机」の意味付け（概念構築）がなされる。しかし、この例において、Laclau の主張する反本質主義とは、「四つの脚」「平たい板」「木製」というのは、あくまで、「机」を定義するうえでの十分な要素であり必要な本質ではないということの意味する。つまり、家族集会的に、「四つの脚」「長い板」「鉄製」や、「三つの脚」「平たい板」「鉄製」といった複数の定義が可能となる。したがって、概念というのは絶対的な本質で構築されているのではなく、「要素」を関連付けることで可能となるということを Laclau は主張する。しかし、Laclau によれば、この要素の関連付けは常に「不完全」である。つまり、「四つの脚」「平たい板」「木製」と机を定義するとき、「三つの脚」、「長い板」や「鉄製」といった要素は排他されなければならないからである。ところが、この他の要素を排他することでまた、一つの概念構築が可能となるのである。したがって、Laclau にとっての意味付けとは特定の要素を関連付けた「閉じた空間 (Closure)」ではあるが、それは、意味の絶対性（実在の意味）への「不可能性 (Impossibility)」ということの意味するのである (Glynos and Howarth 2013; Laclau and Mouffe 1985)。

意味の構築に対して反本質主義哲学を応用することで、Laclau はその理論を談話理論へと昇華している。Laclau にとっての談話 (Discourse) とは、意味の構築のように特定の要素を関連付けることで生まれる統一性として理解することができる。しかし、Laclau の理論における談話構築の要素は言語的な要素のみを意味するものではない。談話分析の理解において、その重要な役割を担う言説分析 (Narrative Analysis) が同義語的に解釈される場合があるが、明確な違いが存在する。後に見ていくように、言説を分析することで、「ある事象がどのように語られ、その言説をもとにどのような行動が提案され正

当化されるにいったか」という言説のみを追うのが言説分析である。しかし、Laclau にとって、その言説的行為によって、誘発される行動、または、言説を誘発させる行為、それに伴い関連付けられた思想や利害 (Interests) とそれらにまつわる関係性等の様々な要素を統一的に関連付けさせたフィールドが談話である。つまり、机という物体の上にパソコンというモノを置き、基本業務後に、学術キャリアのために、論文を作成するという統一されたフィールドが「学者の談話」として理解できるということである。したがって、言説分析のみに焦点を置くことは、学者が書いた文章のみを追うということになるが、談話分析はその分析射程と視座をより広範囲に捉えているのである。

意味と談話構築の理論を展開し、その構築の動向を理解するために、Laclau は最終的に談話の「闘争性」を主張する。上述のように、Laclau にとって、意味とは不完全に要素付けが行われた閉じられた空間である。そして、その不完全さと閉じた空間というものは談話にもあてはまる。したがって、現実という談話構造は常に、不完全に表象されたフィールドということになる。この現実構築の考えが意味するものは、談話構造の存在の裏には、常に、排他された要素と可能であった談話構造が存在しているということである。これはまた、表される世界 (The Real) と談話によって構成される現実 (Reality) というものの差が常に埋まらずに存在しているということも意味する。その埋まらぬ差が露わになる瞬間を、Laclau は「脱臼的瞬間 (Dislocatory Moment)」と呼んでいる (Laclau 1990; Howarth 2013)。つまり、関連付けられていた要素達が外れる瞬間という意味である。そして、この脱臼的瞬間こそ、談話的闘争が勃発、もしくは激化する契機であると Laclau は主張する。すなわち、その世界と現実の差異が明らかになることで、他に可能であった要素と談話が明らかになり、それらを関連付け・発話し、新たな現実の談話構造が誕生しうる契機、または、新たな談話構造の誕生を阻止する行為がなされながら、既存の現実を構成する談話構造の補正・修正が行われる契機ということである。この新たな談話構造の誕生の可能性と既存の談話構造の残存に関する行為の対立こそ

Laclau のいう「談話的闘争」である。したがって、Laclau 的に捉えれば、構築主義者や Gallie の想定するような経験的「闘争性」というのは、「既存の談話構造に内包された限界」と「排他された可能性」に起因するものであるといえるであろう。

5. ラクロリアン談話分析の研究視座と分析射程

5.1 談話分析の分析手順

ラクロリアンの談話理論を明らかにしたところで、実際にその理論をもとにした分析が社会問題等の実証分析にどのように応用できるか明示することは、実際にどのようにその方法論が新たな研究視座と分析射程を提供できているかをより具体的に明確化させるであろう。しかし、その一方で、ラクロリアン談話分析、また、広義の意味での談話分析において、定式化した分析手順というものは存在しないことも指摘されなければならない。これは談話分析自体がまだ発展途上であるということもあるが、反本質主義にみられるような「絶対性の否定」ということから、家族集合的類似性はあるものの、個々の研究間での多様性というものを認めているのである。ここでは、研究手順の一例として言説分析から談話的闘争分析、そして覇権的談話分析という三つの段階を踏む研究手順を明示することで、談話分析の研究視座と分析射程を明確にする²。実例としては、ここでは、談話的闘争が顕著にみられる昨今の英国財政危機の談話に焦点をあてることとする。したがって、まず、英国財政危機談話の言説を批判的に分析し、政治言説を談話的闘争として捉えることで、「財政危機とその対応策（財政政策）がどのように語られたか」という点を明らかにする。そして、その談話的闘争を覇権的談話という観点で捉えることで、最終的に「財政政策をめぐる談話的闘争は、新たな談話の到来をもたらしたであら

うか」という問を、ラクロリアンの研究主眼である「談話的闘争における新たな談話の可能性と不可能性」という観点と関連させつつ、考察していくこととする。

5.2 言説分析

2007 年から始まる欧米金融危機は、第一次世界大戦後の大恐慌（Great Depression）と対置され、大不況（Great Recession）と呼ばれる未曾有の経済危機へと発展した。特に、欧州においては、ギリシャをはじめとする多くの国が財政危機へと突入する結果となった。財政危機が顕著に表れたポルトガル、イタリア、ギリシャ、スペイン等はその頭文字から PIGS と呼ばれ、財政劣等国の代表国となり、日夜経済動向がメディアにより報道されることとなった。しかし、このような国々のみならず、今迄、財政に関しては優良国と言われていた国々もその財政政策の転換を余儀なくされる事態へと追い込まれることになっていった。その顕著な例としては英国が挙げられる。2007 年まで、金融・不動産バブルを謳歌し、財政に関して、GDP 対国家負債が 50% を切っていたにも関わらず、2009 年には 70%、2011 年には 90% に達するものとなっていった。この財政危機に際し、緊縮財政政策を主張する保守党と経済成長政策を主張する労働党間において経済政策言説の対立が勃発することとなった。

財政危機に際しての言説的対立を談話分析するために、はじめに、代表的な対立する言説同士の特徴、つまり、保守党と労働党の言説を問題化分析（Problematisation Analysis）を用いて明確にすることは有益であろう。問題化分析とは、Michel Foucault の理論をもとにした構築主義者らによって広く提唱・応用された分析手法である（Bacchi 2012）。問題化分析とは、端的に言えば、どのように事象が問題化されることで、特定の行為や行動が正当化されるかという一連の言説の流れ（Story Line）（Fischer 2003;

² 他の分析手法と同じように、談話分析においても、分析対象や分析命題によって、分析手順は多様に存在しえる。しかし、はじめに、主要なデータとなる文章の整理と分析として言説分析から始め、その後、「言説外」の分析として談話的闘争性や覇権的談話の分析へと移行する手順は、一例として談話分析の分析手順を示すうえで適切なものであろう（Shimizu 2016）。

Hajer 2009) を明らかにする分析手法である。またこれは、ラクロリアンの、特定の問題化とそれに対する解や行為が、諸所の要素と関連付けることで発話される言説的行為を明らかにする分析といえるだろう。

はじめに、保守党の緊縮財政政策案をよく表したものととして、2009年党大会における保守党党首 David Cameron のスピーチが挙げられる (Cameron 2009)。2009年時点の与党は Gordon Brown 率いる労働党であり、2008年の大規模な銀行救済に見られるように、この時点での政府の基本的な経済政策は、国家支出による不況経済と財政危機からの脱却であった。これに対し、Cameron は、金融危機とそれに続く財政危機は、労働党が作り出した危機 (Labour's Debt Crisis) であると主張し問題化している。Cameron によれば、金融危機以前の経済は、借金漬けの浪費経済であり、それを先導した張本人こそ労働党であった。しかし、この浪費が財政危機という形で限界を迎えたにもかかわらず、その危機をさらなる支出で乗り越えようとするのは、間違った政策であると Cameron は訴え、「無責任な浪費」に対して「責任ある儉約」という言葉を修辭的に対置することで緊縮財政の正当性を主張した³。

2009年時点、未だ野党であったにも関わらず、Cameron のこのスピーチはその題名「The Age of Austerity (緊縮財政の時代)」が示すように、新たな政策の幕開けと考えられた。事実、2010年の総選挙で自由民主党と戦後初となる連立与党を結成すると、キャメロン内閣は緊縮財政政策により大幅な財政支出削減を執行した。しかし、2010年のキャメロン内閣発足後も、国家債務は増え続けることとなる。これに対し、労働党の新たな党首 Ed Miliband は国家主導の経済刺激策による経済成長政策を主張し、キャメロン内閣の緊縮財政談話に対抗した。

2011年の党大会における Miliband のスピーチによれば、国家債務の問題は、労働機会の枯渇と経済成長減退によるものであった⁴。更には言えば、その経済危機の元凶は、危機以前の不適切に規制された金融活動によるものであったとしている。Cameron が指摘するような浪費は、個人融資の行き過ぎが招いたものであり、そのような短期的金融活動は見直されるべきものであるが、長期的な投資はより推し進められるべきであると Miliband は主張している。しかし、行き過ぎた短期的な金融活動によって招かれた危機に対するつけを緊縮財政として国民に押し付けることは誤った政策であり、特に、雇用を

³ キャメロンの財政危機の問題化から緊縮財政の正当化までは、スピーチ中の以下の文章を引用することで集約できるだろう。

Because of the culture of profligacy Labour have created. Where spending money is a good in itself, regardless of what it gets you. Where Ministers brag about getting a bigger budget than the next guy. Only in government do people automatically think that the way to get things done is to spend more money. But it's just not true. ...I stand up for responsibility and thrift. Those are values this country needs today.

「(何故、政府による無責任な浪費が横行したか?) それは、労働党が作り出した浪費文化によるものだ。ここでは、何の見返りがあるうとも、お金を使うことそれ自体が良いこととされている。ここでは、大臣達が、隣人よりも大きな財布を誇らしげにしている。そんな政府の中の人たちだけが、思慮もなく、問題を解決するには金を使えばいいと考えているのだ。しかし、それは、答えではない。・・・私は責任と儉約のために立ちあがる。それこそ、今、この国が必要としているものである。」

⁴ Miliband の財政危機・緊縮財政の問題化から金融中心の経済成長政策の正当化は、スピーチ中の以下の文章を引用することで集約できるだろう。

With austerity at home, collective austerity abroad. It is no solution to the problems of jobs, growth or the deficit... there is no solution to the problems of deficits without a solution to the problems of growth. Their plan is not working. But it is hurting.

An economic crisis caused by poorly understood, and inadequately regulated, financial activity. A deficit which went up sharply after the 2008 crisis, in part because of Britain's dependence on one sector in particular: financial services. The struggle to maintain living standards for people became too dependent on higher levels of personal debt.

We need to refund the relationship between finance and the real economy. So in the new economy we need to see a finance sector, the success of which isn't measured simply by short term profits made and taxes paid. But by whether those profits are sustained by fulfilling its role as the beating heart of the economy. Getting finance to the right businesses at the right time, and so providing returns for savers and pensioners.

「国内における、そして世界同時的な緊縮財政。それは職や経済成長、まして財政赤字の問題への答えではない…。経済成長への解決策なくして財政赤字の解決などないのである。彼ら(保守党)の(緊縮財政)計画は機能しない。むしろ、自体を悪化させる。不適切に、また、十分に理解を得られていなかった金融活動が一つの経済危機を起こした。2008年の危機よりも飛躍的に増した財政赤字は、一つのセクター、つまり、金融サービスにイギリスの経済が頼りすぎていることに発端がある。良い暮らしを維持するため過剰な個人負債をするようになっていた。我々は金融と実質経済の関係を立て直す必要がある。今後の経済において、我々は、金融業の成功をただ短期的な収益や税金額で図るべきではない。その恩恵は経済を活気づける役目を果たすことで維持されているか、それを基準とすべきである。金融を適時適切なビジネスにすること、そうすることで、貯蓄家や年金受給者に恩返しすることが出来るだろう。」

減らし、経済成長を減退しているという点で、緊縮財政は解決策ではなくそれ自体が問題であると糾弾したのである。この危機と緊縮財政に対する問題化をもとに、Milibandは、金融活動の見直しによる長期投資の促進を解決策として提案している。つまり、金融業というものはもはや英国経済において、主要な役割を担っていることは間違いのないものであり、その役割をより長期投資に向けさせることで、社会に還元できる形にするのが正しい政策であり、現況の経済危機を打破する政策として正当化したのである。

以上の様に、CameronとMilibandの言説を見ることにより、危機に関する言説の闘争が発生していることが判る。また、問題分析の観点から、どのように、「経済状況」、または、「危機」やその「因果関係」を問題化するかで、特定の行為や国家的対策が正当化されているか確認することが出来る。これは、ラクロリアンの解釈すれば、「経済状況」や「危機」といったものの本質的定義が存在しないため、それらを定義づけする際に、解決策も含めた様々な要素が関連付けされることで異なる統一性が誕生し、闘争するに至ったと考えられる。例えば、Cameronの例でいえば、「経済危機」「無責任な浪費」「労働党の失敗」「責任ある儉約」そして「緊縮財政」という要素が関連付けられているということである。反対に、Milibandにおいては、「雇用の枯渇」「経済成長の衰退」「短期的金融の失敗」「緊縮財政の限界」「金融業の見直し」「長期的投資活動を中心とした経済成長」という要素が関連付けられていることが判る。そして、これらを統一する言説の流れ（Story line）として、問題化分析、すなわち、問題から解決策の正当化までを検証し、どのように対置的な言説の流れが存在しているかを明らかにすることは、談話的闘争を理解する初段階において有効なものといえるだろう。

5.3 談話的闘争分析

問題化分析にて、言説の流れの統一構築とそれに伴う要素の関連付けを明らかにしたところで、それら言説的行為における談話的または言説的所作を見ていくことは談話的闘争のダイ

ナミクスを理解するうえで重要といえる。

例えば、Cameronの言説において明らかにしたように、国家支出を「無責任な浪費」と意味付け、その対置として、緊縮財政を「責任ある儉約」という様に修辭的対置で意味付けることで、その正当性を訴えている。この「修辭」もまた、言説分析において、重要な言説的所作といえる。修辭、レトリック（Rhetoric）とは、政治言説分析において、「聴衆に対し、発話者の想定を受け入れさせる行為または所作」として理解することが出来る（Finlayson 2013; Martin 2013）。つまり、現状の経済状態は労働党の間違った経済政策によるものという前提のもと、その真逆の政策である緊縮財政を対置的意味付けにて発話することで、「誤った行為」に対する「正しい行為」として、正当性を主張できるということである。このレトリックによる言説的所作は、想定が大きければ大きいほど、対峙する談話や言説に対して対立的な談話や言説を構築することが出来るだろう。事実、Milibandの言説に関しては、この修辭的所作は弱い。「緊縮財政は答えではなく問題それ自体」といったような訴えはなされるものの、それに対する「長期的金融活動を中心とした経済成長」という要素の対置的意味付けが明らかにされていない。むしろ、Milibandにおいて、顕著な談話的・言説的所作というのは、「長期的投資活動」という要素と「経済成長」という要素の関連付けとその正当化であるといえる。

まず、Milibandにとって、「長期的投資活動」と「経済成長」という二つの要素を関連付けるには、ブレア・ブラウン政権時より構築された英国経済における「金融の役割」の擁護をする必要があった。上述のように、Milibandは危機の元凶を「短期的金融活動」として認めつつも、「金融街の功罪」を修辭的にかき消すことから始めている。つまり、問題であったのは特定の「短期的金融行動」であって、その行動を抑止するような新たなルールによって、実質経済と金融の新たな関係を作り直すことが出来ると主張している。この点において、「短期的自己利益追求型金融」を「問題」とし、「長期的投資型金融」を「解決策」とする修辭的意味付けを行っている。そして、最終的に、「長期的投資

型金融」を正当化したところで、Cameron の緊縮財政に対する「経済成長」と対置的発話を行ったと理解することができる。

Miliband の言説的所作は、当然、キャメロンの直接的与党批判における修辭的言説所作と比較した際、言説の闘争における役割は弱い。修辭という所作が Miliband に関しては、内向なモノに対して、キャメロンのものは外的なものに対して行われている。しかし、このように、言説的所作の違いを理解する際、何故、このような違いが表れたかを、理解することは、談話分析として有効である。つまり、何故、Miliband の内向な修辭的所作が行われたのかということである。この点に関して、ラクロリアンの談話分析における、利害関係もしくは既得権益（以後、両方を意味するものとして「利害」と呼ぶ）の所在が重要になる。

欧米政治経済分析において、利害 (Interests) という概念は、研究における重要要素の一つであることに議論の余地はないだろう。しかし、利害というものの所在や役割の認識というものは、各研究アプローチに依拠する。特に、構築主義においては、利害というものは、思想により付与されるものであり、利害中心主義的な研究から一線を画している (Blyth 2002, 30-34; Fischer 2003, 46)。他方、ラクロリアンに関しては、利害と思想の関係はどちらにも優越を認めてはいない (Howarth 2013, 251-264)。利害を守るために特定の思想が発話されることもあり、構築主義が主張するように、思想により、特定の利害を認識することもありえるということである。この利害の理解をもとに、Miliband の談話もまた理解できる。つまり、金融というものの役割を守るということに、金融街と労働党との政治的利害関係を守ることも発話されるということである。実際、ブレア・ブラウン政権によって構築された金融中心の経済システムを Miliband は明確に擁護している。これにより、労働党における政策の一貫性という党内利害関係も保つことができたといえよう。したがって、Miliband の言説では利害の関連付けという談話的行動も同時になされていたといえる。当然、政治の言説において、有権者の票を得るという観点から、Cameron の談話にも政治的利害の関

連付けがなされていることが確認できる。しかし、両者を比較した際、Miliband の言説に関しては、利害に関する談話的所作が顕著であったということが指摘できる。ところが、その Miliband の利害に関する談話的所作は、保守の緊縮財政談話に対抗するものとしても、また政策的代替案としても不完全な結果になったといえよう。

5.4 覇権的談話分析

Cameron と Miliband のスピーチにおける、言説的・談話的特色とその闘争性を明らかにしたところで、「何故、緊縮財政が談話的闘争において優位となったか」という点を明確にすることは政治経済分析においては有効であろう。上述のように、言説的な理由としては、Miliband の掲げる経済成長戦略という言説が、Cameron 保守の緊縮財政という言説に対抗しきれていなかったことが挙げられるであろう。しかし、上述のように、言説のみの動向を追うことは、談話分析として不完全な分析と言わざるをえない。この点において、オランダの談話分析学者 Maaten Hajer (1995&2009; Hajer and Wagenaar 2003) が提唱する「談話的連合 (Discursive Coalition)」という概念を用いて、緊縮財政がいかにして談話的優位性を得たかという考察が可能であろう。

談話的連合とは、Hajer によれば同類の談話や言説を共有するアクター達に表象される連合またはネットワークである。財政危機に関していえば、Cameron 率いる緊縮財政という言説と談話は、大局的には、欧州中央銀行を中心とした金融危機以後の優勢な談話的連合の一端と解釈することができる。金融危機以後、David Harvey (2014) や Mark Blyth (2013) らが指摘しているように、欧州全体の社会において、「金融危機以前のバブルが行き過ぎた浪費経済状態」(Blyth 2013, 276) であったという罪悪感的なロジックが一般大衆に広く浸透していた。そのため、Cameron の指摘するような、「責任ある儉約としての緊縮財政」は、談話的優位性を確立し、メディアや政治家等の政治経済エリート層において確固たる談話的連合が成り立っていった。したがって、(今後、より幅広く詳細

な分析を必要とするもの) 緊縮財政政策の優勢的な談話的連合の形成と波及により、さらなる国家支出を必要とする経済成長戦略などは談話的闘争において劣勢にならざるをえなかったと結論付けられるであろう。

以上の様に、談話的闘争を言説レベルから談話レベルまで捉えたうえで、最終的に、「財政政策をめぐる談話的闘争は、新たな談話の到来をもたらしたか。」という問を考察することが可能となるであろう。しかし、この問をよりラクロリアン的に答えるために、「覇権的談話」というラクロリアン特有の概念と、その政治的所作である「覇権的オペレーション」という概念を明らかにする必要がある。

2007年から始まる金融危機とそれに続く財政危機は、それ以前の経済体制の限界を表したという点で、Laclau のいうところの「脱臼的契機」として認識できる。事実、その脱臼的契機における経済状態をどのようにマネジメントするかという点をめぐって談話的闘争が勃発したのは上述で示したとおりである。そして、その闘争を経て、緊縮財政という談話が優位性を得るに至った。この緊縮財政の優位性の確立は、政策レベルにおいては、談話的変革と言えるものであろう。それまでの労働党 (Brown) 主導の経済成長政策は保守党が政権を奪取することで、否定され、また新たな労働党党首 (Miliband) 下における経済成長政策も緊縮財政の優位性を覆すものではなかった。したがって、金融危機後の英国政治経済談話は経済成長政策から緊縮財政へと確実に移行したのである。しかし、その一方で、この政策レベルでの談話的変革をラクロリアンが言うところの談話的構造の変革、平たく言えばマクロレベルでの政治経済体制または構造変革を促す様な談話的変革としてみなすことはできない。事実、欧米における政治経済学者の多くが、危機における政策レベルでの変革的動向を指摘するものの、体制レベルまたは構造レベルでの変革を否定的に見ている。この構造変革への否定的な意見は、「新自由主義の不死」という名で議論されているものである。

「新自由主義の不死」とは、英国ファビアン協会社会学者 Colin Crouch (2011) によって提

唱された 2007 年以降の金融危機政治経済への見解である。Crouch にとって、今回の金融危機とは、1980 年代のサッチャー以降に構築された金融を中心とした政治経済体制もしくは構造の危機を意味していた。サッチャー、そして、特にブレア・ブラウン政権下における PPP (Public-Private-Partnership) や PFI (Private-Finance-Initiatives) 等の政策によって押し進められた金融を中心とした公共政策は、福祉等の国家的プロジェクトの中核に金融業を埋め込むこととなった。Crouch はこの金融を中心とした政治経済構造を新自由主義と呼んだ。Crouch によれば、今回の危機は、この新自由主義の限界を露呈することとなったが、反対に、その構造的硬直性も明らかにしたと主張している。つまり、一端、金融圧迫などで金融業が麻痺の状態に陥ると、その影響が社会全体に広まるという構造的欠陥があるにも関わらず、金融が経済構造の中核を担っているため、それが元凶で起きた危機にもかかわらず、国家は金融業を第一に救済せざるをえない現状を露呈したということである。したがって、今回の危機は、金融中心の政治経済構造、新自由主義の限界を露わにしたにもかかわらず、結局、金融第一主義的な体制により、政治経済構造は改革されることはなかったと主張したのである。

Crouch の新自由主義の不死は、Laclau の「覇権的談話」とその政治的所作である「覇権的オペレーション」という概念をよく表している。よりの確に言えば、新自由主義は、現代政治経済における覇権的談話として理解することができる。覇権的談話とは、ラクロリアン的に言えば、その中の主体によって、日々日常という構造として受け入れられ、また再生産されている談話を意味する。より詳細に述べれば、覇権的談話の「覇権」という概念は、Antonio Gramsci (1929-35=1973) の「ヘゲモニー」概念に依拠している。Gramsci によれば、資本主義のイデオロギー的プロジェクトというのは、その覇権的優位性の波及を意味していた。例えば、アメリカ型フォーディズムによる大量生産型工業中心経済が旧来の伝統産業に対して新たな主要産業として台頭する際、大量生産型工業中心の資本主義が独占的に維持されるように、従来の社会的慣習などを含む制度を塗り替え、社会経済

の根幹を変革していった。この覇権的イデオロギープロジェクトをもとに Laclau は「覇権的談話」という概念を提唱している。したがって、新自由主義の覇権的談話とは、Crouch が明らかにしているような、金融を中心とした制度政体とそれをもとにした社会経済の構造と理解することができる。そして、Laclau によれば、覇権的談話構造下の主体は、その談話の危機に際し、共約不可能な要素を排他し、共約可能な要素を取り込むことで、現状を維持する行為を強要されるのである。そして、この覇権的談話構造下における主体に特定の関連付けを促す所作こそ、ラクロリアンが「覇権的オペレーション (Hegemonic Operation)」と呼ぶものである (Howarth 2013, 73-74)。これは、新自由主義の談話においては、金融中心の構造を維持する所作を促す所作であるといえよう。この覇権的談話という概念と覇権的オペレーションという概念を念頭に、上述で明らかにした財政危機における談話的闘争はより批判的に見直すことができる。

Miliband が指摘しているように、Cameron の緊縮財政という談話は、それ自体が、「金融業のつけを国民が肩代わりする」という行為である。事実、Cameron は、緊縮財政の言説において、金融危機を「政府の失敗」「政府の無責任な浪費」という形で問題化することで、その危機の発生元である金融街についての問題化は避けている。これに対し、Miliband は、危機の責任の所在を金融街に認めてはいるが、修辭的発話により、「金融の役割」と「金融中心の経済構造」を明確に擁護している。上述のように、Miliband にとって、「短期自己利益追求型金融」は間違った行為であるとし、「長期投資型金融」の正当性を主張している。しかし、この修辭的問題化の構築により、Miliband は、最終的に「金融中心経済の脆弱性」というものを一切問題とせず、言説を構築していることがわかる。したがって、Cameron と Miliband の両談話において、「金融中心」という覇権的談話の主要な要素は一切問題化されず、つまり、新自由主義の覇権的談話にとって共約不可能な問題は発話されず、「緊縮財政」や「長期投資型金融」といった共約可能な要素のみが発話されているということである。そして、これらの主体に、覇権的

談話に直接対抗する談話的行為を可能にしないことこそ、新自由主義の覇権的オペレーションとして理解することができる。したがって、政策レベルではなく、構造レベルで見ることで、財政危機における談話的闘争も、「新自由主義の不死」という事象の一端として理解することが可能となり、覇権的談話の変革を及ぼすものではなかったと結論付けられる。

このように、談話分析を展開することで、政治経済現象等の事象が批判的に分析できることが明らかになったであろう。当然、この分析手法は、政治経済のみならず、他の事象に多様に応用することが可能である。特に、政策研究等においては、上述の例で示したように、「何故、ある特定の政策が優位性を得て、オルタナティブな政策が不可能となったか」というような問を考察することが可能となる。事実、この「可能性と不可能性の考察」こそ、ラクロリアンの第一義的な分析射程である。しかし、「可能性と不可能性の考察」をラクロリアンの第一義的分析射程と主張するとき、何故、現代社会科学研究において、それらを考察する必要があるのか。この問に対して、上述にて明らかにした方法論的また哲学的背景は一つの解といえることができるが、これらをまとめ、より総体的な解を与えるには、歴史的背景を明らかにし、談話分析が現代社会科学にどのように新たな研究的視座をもたらしたかを明確にする必要があるであろう。

6. 歴史的背景

上述の Gallie のように、論理哲学と科学手法の台頭による政治哲学の危機というのが、談話分析誕生の背景として指摘できる。しかし、また、同時代的潮流として特に政治経済分析等においてイデオロギー分析や批判といったもの、「時代遅れなモノ」として認識されるようになったことも談話理論とその分析が誕生した理由ともいえる。この歴史的背景を理解するために、「イデオロギーの終焉」という理論とそれが表した近現代史における政治経済学的現象を振り返ることは有益であろう。事実、近現代の「イデオロギーの終焉」という風潮自体を、

『『イデオロギーの終焉』という名のイデオロギー』として認識し、新たな政治分析の視座を提供したことに Laclau の脱構造主義的談話分析が誕生した主たる所以がある。

「イデオロギーの終焉」論は、昨今では Francis Fukuyama の歴史の終焉論にて提示されたものが代表的なものと捉えられている。Fukuyama の『歴史の終わり』(1992=1992) は 1989 年に National Interest において発表された『歴史の終わり?』(Fukuyama 1989) がもとなった著書である。それは、80 年代の冷戦の決定的な終焉を、ヘーゲルの歴史史観をもとに、政治経済イデオロギーによる国家間闘争の終焉として捉えたものである。日本においても、このアメリカ型資本主義礼賛的ミレニアニズムは冷戦の意味付けとして広く受け入れられた。しかし、Fukuyama の『歴史の終焉』に表された思想の位置づけはそれ単体で理解すべきものではなく、大局的な意味で「イデオロギーの終焉」論の一端として捉えられるべきものである。

イデオロギーの終焉は、古くは、Mannheim の著書『イデオロギーとユートピア』(1929=2006) にて先見的な指摘を見て取ることができるが、近現代史における政治経済的な現象としては、アメリカ社会学者 Daniel Bell (1960=1969) の著書『イデオロギーの終焉』と Martin Lipset (1960=1963) の著書『政治のなかの人間』にて明確に理論化とその実証がされ始めたものといえる。Bell と Lipset によれば、イデオロギーの終焉とは、国家間イデオロギー闘争におけるアメリカ型の民主主義的資本主義の絶対的な勝利を意味していた。Bell と Lipset の著書はそれぞれ 1960 年に執筆されたものであるが、冷戦の最中にもかかわらず、アメリカの勝利宣言をするものであり、その根拠となるものは、「科学的」データと実証であった。

Bell の著書においては、いかに、ソビエト等の共産圏で掲げられた社会・人類進化論が幻想的理想でしかなかったかを痛烈に批判し、Lipset においては、統計的データによる投票動向等の政治社会構造分析がなされ、マルクス主義的分析の「資本家 対 労働者」の様な定式的構造分析をイデオロギー的分析として批

判した。このことから、Bell と Lipset は今後の社会科学における実証主義的科学主義の台頭を示唆し、そのようになっていくことの正当性を主張した。そして、20 年後の雪解けとともに、共産主義の政治的プロジェクトは終焉を迎え、実証主義的科学主義をその発展の基盤としていたアメリカ型資本主義が覇権を握ることとなったのが Fukuyama の示す「歴史の終焉」である。

この「イデオロギーの終焉」論に対し、Laclau は、「イデオロギーの終焉」とはそれ自体が覇権的談話によるイデオロギー的活動であると主張した (Laclau 1997)。つまり、「イデオロギーの終焉」とは、アメリカ型資本主義以外の政治経済体制の不可能性を訴え、さらには科学主義による統一性を図ることで、他の可能性を不可視化する活動であるということである。しかし、この不可視化された可能性を明らかにし、また、どのようにオルタナティブな可能性が不可視化されていたかを暴き出すことが、ラクロリアンが提唱する談話分析の究極的な分析的視座である。そして、この談話分析という新たな研究手法を提唱することで、「イデオロギーが終焉」を迎えたといわれた時代に、Laclau はイデオロギー分析とその理論を社会科学の歴史に再生させたのである。

7. 結びに代えて

くしくも、Fukuyama が歴史の終焉を提示した 90 年以降、世界は各地で様々な「危機」を経験することとなる。イラク戦争から始まり、中東問題の再熱、欧米経済危機、中露による強行外交、イスラム国テロ。これらの危機が表していることは、ラクロリアン的に言えば、覇権的談話の「脱臼的契機」であろう。そのほころびを見せ始めた欧米をはじめとする先進国では、極右的な傾向が表れ始めている。この傾向は、各国の覇権的談話を維持するために、維持できなくなったグローバル化による先進国の共同意識の排斥を意味するのだろうか。David Harvey (2005) が指摘しているように、グローバル化の中の国家主義的特色が新自由主義の中核的要素であるならば、グローバリズムという覇権的談話の限界に際し、その国家

主義という傾向が強く表れるようになったことを意味するのであろうか。いずれにせよ、この危機の時代における談話の動向は、談話分析の射程である。しかし、本稿で論じてきたように、この歴史の動向を理解するうえで、政治的な談話動向を理解することは、必要条件であって、十分条件ではない。この歴史の潮流の根底には、我々研究者のツールである研究手法とその基盤となる哲学の趨勢が存在する。ラクロリアン談話分析構築に貢献したスロベニアの批判哲学者 Slavoj Žižek は、金融危機の批判的考察の中で「Fukuyama を笑う者達は、往々にして、Fukuyama の夢の中にいる」(Žižek 2009, 26) と述べた。90年代から2000年までの歴史は、経済的には「大いなる安定 (Great moderation)」の時代と呼ばれた。しかし、その安定の談話的構造において、排他されてきた要素達が、今、危機の要因となって表象していることは間違いないことであろう。また、その覇権的談話による排他的行為は、「科学」の名で正当化された政策によるものでもある。論理実証主義、特に、合理主義的な政策において、「科学的傾向」という肯定的要素の効用最大化が目的とされてきた。しかし、この効用最大化という夢は、その科学的傾向という肯定的要素によって構築された談話構造内において正当化されたものである。この科学的傾向、もしくは、既存の談話的構造から排他された否定的要素を認め、どのようにその排他されていた要素を取り組むことで新たな談話構造を構築することが可能であるか、その根源的な可能性を探っていくことで、終幕されていた歴史の新たな幕開けを構築していくことが可能であろう。

参考文献

- Bacchi, C. (2009) *Analysing Policy: What's the problem represented to be?* Pearson.
- Bell, D. (1960) *The End of Ideology*. The Free Press. (=1969、岡田直之訳『イデオロギーの終焉』、東京創元新社。)
- Blyth, M. (2002) *Great Transformations*. Cambridge University Press.
- (2013) 'The Strange Non-Death of Neoliberalism.' by Colin Crouch. ILRReview66, no.1. 276-278.
- Butler, J., Laclau, E. and Žižek, S. (2011) *Contingency, Hegemony, Universality*. Verso.
- Callon, M. (2006) 'What does it mean to say that economics is performative?' CSI Working Papers Series005.
- Crouch, Colin. (2011) *The Strange Non-Death of Neoliberalism*. Polity Press.
- Finlayson, A. (2013) 'Critique and Political Argumentation.' *Political Studies Review*, 11, no.3. 313-320.
- Freedman, M. (2003) *Ideology: A Very Short Introduction*. Oxford University Press.
- Foucault, M. (1978-1979=2008) *The Birth of Biopolitics: Lectures at the Collège de France*. Macmillan Palgrave.
- Fukuyama, F. (1989) 'The End of History.' *The National Interest*, Summer. 3-18.
- (1992) *The End of History and the Last Man*. New York: Free Press. (=1992、渡部昇一『歴史の終わり』上・下、三笠書房。)
- Gallie, W. B. (1956a) 'Art as an Essentially Contested Concept.' *The Philosophical Quarterly*, 6, no.23. 97-114.
- (1956b) 'Essentially Contested Concepts.' *Proceedings of the Aristotelian Society*, 56. 167-198.
- (1957) 'What Makes a Subject Scientific?' *The British Journal for the Philosophy of Science*, 8, no.30. 118-139.
- Gofas, A., and Hay, C. (2010) 'Varieties of ideational explanation.' in *The Role of Ideas in Political Analysis*. Gofas and Hay (eds). 10-34. Routledge.
- Glynnos, J., and Howarth, D. (2007) *Logics of Critical Explanation in Social and Political Theory*. Routledge.
- Gramsci, A. (1929-35=1973) *Prison Notebooks*. Lawrence&Wishart Ltd.
- Hall, P. (1993) 'Policy Paradigms, Social Learning, and the State.' *Comparative Politics*. 25, no.3, 275-296.
- Haywood, A. (2003) *Political Ideologies 3rd ed.* London: Palgrave Macmillan.
- Hajer, M. (1995) *The Politics of Environmental Discourse*. Oxford University Press.
- (2009) *Authoritative Governance*. Oxford University Press.
- Hajer, M., and Wagenaar, H. (ed) (2003) *Deliberative policy analysis*. Cambridge University Press.
- Howarth, D. (2013) *Poststructuralism and After*. Palgrave Macmillan.
- Howarth, D., Norval, A. and Stavlakakis, S. (2000) *Discourse theory and political analysis*. Manchester University Press.
- Kuhn, T. (1962) *The Structure of Scientific Revolutions*. University of Chicago Press. (=1971、中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房。)
- Laclau, E. (1990) *New Reflections on the Revolution of our Time*. Verso.
- (1997) 'The Death and Resurrection of the Theory of Ideology.' *MLN*, 112, No.3. 297-321.
- (2005) *On Populist Reason*. Verso.
- Laclau, E., and Mouffe, C. (1985) *Hegemony and Socialist Strategy*. Verso.
- Lipset, S. (1960) *Political Man*. Anchor Books. (=1963、内山秀夫訳『政治のなかの人間—ポリティカル・マン』、東京創元新社。)
- Mannheim, K. (1929=1991) *Ideology and Utopia*. Psychology Press. (=2006、高橋徹&徳永恂訳『イデオロギーとユートピア』、中央公論社。)
- Martin, J. (2013) 'Situating Speech: A Rhetorical Approach to Political Strategy.' *Political Studies* 63, no.1. 1-18.
- Shimizu, S. (2016) *The Battle of Economic Idea*. Essex University PhD Thesis.
- Stone, D. (2001) *Policy Paradox (3rd)*. W.W. Norton & Company.
- Wittgenstein, L. (1921) *Tractatus Logico-Philosophicus*. Annalen Der Naturphilosophie. (=1971、山元一郎訳『論理哲学論』、中央公論社。)
- (1953) *Philosophical Investigations*. Blackwell Publishing. (=1978、奥雅博訳『哲学的考察』、大修館書店。)
- Žižek, S. (1989) *The Sublime Object of Ideology*. Verso.
- (2009) *First as Tragedy, Then as Farce*. Verso.

ウェブページ

- Cameron, D. (2009) 'The Age of Austerity.' *Conservatives.com*. Retrieved on July 22, 2016. <http://www.webarchive.org.uk/wayback/>

archive/20091208014303/http://www.conservatives.com/News/Speeches/2009/04/The_age_of_austerity_speech_to_the_2009_Spring_Forum.aspx

- Harvey, D. (2009) 'Is This Really the End of Neoliberalism?' *Counterpunch*. Retrieved on July 15, 2016. <http://www.counterpunch.org/2009/03/13/is-this-really-the-end-of-neoliberalism/>
- Miliband, E. (2011) 'Speech on a new economy.' *Statesman*. Retrieved on July 15, 2016. <http://www.newstatesman.com/economy/2011/11/term-business-government>